

僕と彼女の関係

橋本コウ

上目づかいをしたときの、黒目がちの瞳が好き。見つめ返す僕をまばゆく反射させる瞳の中に、僕自身も閉じ込められていくようだ。顔を近づけて目と目がつきそうになると、いよいよ瞳に閉じ込められそうな感覚が強くなるが、僕はそれでもいいと思う。彼女といっしょになれるなら。

#

彼女と森のある公園に行った。彼女は、あまり人工的なものが好きでないので、森とか、山とか、湖とか、海とか、いかにも自然を満喫できそうな場所に行くことがほとんどだ。

「はやくこっちにおいでよ。こっちは涼しいよ」

彼女は僕の足どりに合わせることはなく、気まぐれな散歩のように、まわりを見回しながら歩いていた。公園の舗道から外れて芝生の上を歩いたり、天気がよければそこで寝転んだり、ちょっと変わってると思う。でも、彼女にとってはそれが楽しくて、もしかすると至福のときなのかもしれない。僕ははたから見ていただけだけど、彼女が幸せそうだから、それでもいいと思う。

#

彼女とは、大抵はいっしょに寝ているが、朝目覚めると僕とは頭を逆にして寝ていたり、ベッドから出て床に寝ていたりすることが多い。僕の寝相が悪いのか、寝言がうるさいのか、真意は聞いていないから分からない。彼女から指摘されることもないので、そのままにしているけど、それでもいいと思う。彼女がうちから出て行くこともないし、腕枕したまま次の日を迎えることもあるから。

#

僕と彼女の関係は、これらのエピソードが示すように、ちょっと変わった行動をする彼女を、苦笑いしつつも微笑ましくてかわいいと思ってしまうお人好しの僕がいる、という構図だ。

最初からこの関係を求めてたわけではない。僕なりに彼女とコミュニケーションをはかって、もっと彼女を知りたいと思った時期はあったけど、それはもう5年くらい前に諦めた。結局は言葉では理解できないことが多すぎて、言葉での理解はやめようと思ったのだ。これは精神的なものでも、心理的なものでもなく、文字通り会話をすることがなくなった。彼女の声を聞くのは、夜の動物的な声だけだ（朝や昼にも聞くのだけれど）。

#

こんな関係ではあるけれど、僕は彼女といっしょにいられて幸せだと思っている。とてもかわいし、まわりの友達もみんなかわいって言ってくれる。それも男、女に関わらず。言葉にするのは恥ずかしいけど「みんなの人気者」。

#

上目づかいをしたときの、黒目がちの瞳が好き。彼女はその黒目がちの瞳の奥で、何をみているのだろうか？ そんな僕の気持ちとは裏腹に、今日も僕は彼女と無言の散歩に出かける。